

地方だより

名古屋航空測候所



今まで小牧飛行場といわれていたのが今の名古屋空港で、小牧といえば秀吉家康の合戦で名高い小牧山と戦後米人に評判になった天下の奇祭の田原神社とこの飛行場の三つで知れわたっているが、昨今高速道路でも名が売れ工場誘致運動も盛んである。地元では国際空港にする運動があり中京の表玄関になりつつある。

東京から飛行機で来ると、浜松を過ぎて約15分高度がぐっと下がり「ベルトをお締め下さい」のランプとともに間もなく名古屋空港到着のアナウンスがある。東京から1時間20分位で着陸だ。随分長い滑走路で約2千8百メートル、日本でも有数の長さでジェット機に好都合で自衛隊小牧基地も並置されている。ジェット機の沢山並んでいる小牧基地の反対側が空港で、空港ビルに向つて誘導路を進む右側におよそ近代的空港施設とは不似合な白いカマボコ兵舎が2棟並んでいる。これが名古屋航空測候所で、やがてビル前のエプロンにとまりやっと大地を踏むが、こゝは愛知県西春日井郡豊山村といふ、名古屋駅まで車で30分で周囲は今のところ畑が多い。機中で見たカマボコ兵舎はエプロンの向側にポツンとあり、所長、業務係、観測課はそこで勤務し、予報課はビルに並んだ建物の一室にある。やがて空港ビルが増築され測候所全部その中に入り、現在の不便も解消される予定で、目下計画中である。

航空機は視程4.8km 雲底450m以下では計器を用いて離着陸し、また視程800m 雲底60m以下では飛行場使

用不可能とか、視程、雲底について細かく規程されている。そのため観測、予報も特にこれらに重点がおかれている。観測では普通の地上観測の外、シーロメーター(当所のは光を雲に発射して雲で反射し、戻ってくる時間で雲底の高さを測定出来る測器)やトランソメツメーター(まだ当所にはないが東京航空地方気象台では用いている)を用い24時間中常時細かく観測している。予報はまた一般の天気予報と異り、視程、雲底、風向風速(上層も)、上層気温、着氷、タービレンス等々を予報し、個々の航空機乗員に目的地までの予報を説明し、観測値と共に航空機関に通報している。また名古屋空港は東京国際空港が、天候その他で使用出来ない時の代替空港と決められているので、この観測、予報の値は全国ばかりでなく外国へも通報されている。

日本で始めて日野、徳川両大尉によって飛行機が飛んでから約50年、戦後航空再開して約10年。航空技術も日進月歩で、これに対する気象業務もキチンと規定化され軌道に乗ったわけではなく、航空機の進歩に対応する気象の進歩は、年中追いつこうと努力しているわけで、一步一步皆で築きあげてきたものである。当所も本年3月1日で創立10周年になり、その間着々と整備されてきたが職員も以上のような理由でやりがいがあり、希望に燃えているわけである。

(平野俊郎記)

